

ああ、相談業務

～ 拓也くんの話 ～

カウンセりんぐるうむ かかし

16

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は不登校の子どもの話である。なんといっても、子どもの相談のほとんどが不登校で、男女の差はなく、年齢も小学校低学年から高校生までばらばらである。ただ、中でも多いのは中学生である。高校受験を考えて中学生の不登校については保護者が不安になるのもある。今回の拓也くんは小中高と関わってきたケースである。

家族

拓也くんは、母親と妹の三人家族である。拓也くんと出会った当時、小学5年生で、妹は3年生、母親は29歳会社員。父親とは離婚したばかりで、父親は関東に住んでいた。離婚理由は父親の金銭問題だった。三人は、市営住宅に住んでいた。

相談経過

拓也くん（以下本児）の相談が入ったのは、秋の気配が漂う頃、学校からであった。4年生にな

ってから、パラパラとしか学校に来ていなかったのが、夏休み明けから全く来なくなったという。そして学年が上がっても、その状況が変わらないという。

学校としては何とか学校に来させたいとっていて、母親と連絡を取ろうとするが、中々取れないし、母親自身も余り積極的に登校させようという感じが無いとのことだった。家に訪問しても本児しかおらず、本児は出てこないのでお手紙を入れて帰ってくるだけという。3年生の妹は登校できているので、妹から様子を聞くと、昼間はずっと寝ていて、妹が学童保育から帰るころ起きだし、その後はずっとゲームをしているそうである。

かなりのゲーム依存状態であることが想像できた。学校が連絡を取りづらい母親と、筆者がいきなり連絡を取れるものか疑問であったが、まずは母親と連絡を取ることを考えた。学校から筆者が連絡を取りたがっているからと言うことで、母

親の携帯番号を教えてよいかの許可を得てもらうこととした。

数日後、学校から連絡があり、携帯番号を教える許可を得たとのことで教えてもらった。意外と早く繋がったらしい。

会社員でもあるので、まずは昼休みが良いかと思い、昼時に電話を試してみた。一回でつながるとは思わなかったが、知らない番号からの電話だったからか、一回で母親が出た。市のスクールカウンセラーであることを伝え、母親とお話したいが日時の都合はどうかと尋ねた。市のカウンセラーではあるが、かかしもあるので土曜日でも夜でも構わないと伝えたところ、夜であればとのこと、数日後の夜19時からかかしでの面談となった。子どもたちを連れてきて構わないと伝えていたが、二人で留守番ができるというので置いてきたとのことだった。

母親は小柄だが、しっかりした体つきで、受け答えもきちんとしており、やり取りもスムーズだった。

母親の実家は道北で、母方祖父母と母方叔父がいることが分かった。年に数回会いに行くなど交流はある。祖父は心臓が悪く糖尿もあり、母親は足が悪いのと高血圧があるが、何とか元気にやっているようであった。

本児の父親がとてゲーム好きで、ゲームばかりだったので、母親としては本児にゲームを与えないと思っていた。しかし父親が勝手にゲームをどんどん買い与えてしまい、父子でゲームを楽しむようになった。場合によっては父親が仕事に行っている間、本児にレベル上げを頼んでいくなどと言うこともあったという。父親は働いてはいたが、お金の使い方が荒く、生活にも支障をきたすようになり、借金も増えたことから離婚をすることになったそう。嫌いになったわけではないので連絡は取り合っており、本児や妹とも物理的に遠いので会うことは無いが連絡は取り合っているという。

もともとゲーム好きだったのが、半年前に父親がいなくなってから、余計にゲームにはまるよう

になったそう。学校には行ってほしいと思って、あれこれ工夫して、学校まで送って行ったこともあった。しかし、学校の対応も悪く、頑張っ学校に行っても、本児の口の利き方や態度について叱責したり、勉強の遅れのために、放課後いきなりテストや補習で詰め込まれたり、褒められることもなく、拳句に本児が切れて暴れてしまったため、「発達障害ではないか」、「病院に」などと言われ、連れていくことにも抵抗を感じるようになったそう。本児が学校に来やすいようにしてもらえないかと話してみたこともあったが、本児だけのために学校があるわけではないからと言われ、これでは無理だと思ったとのことだった。

本児は家でどんな生活をしているか聞くと、妹からの情報の通りで、昼夜逆転状態で、ずっとゲームをしているという。母親自身夜は疲れて寝てしまうため、何時間くらいゲームをしているのかはわからないそう。ある意味放っていると。本人の責任という言葉が出ていた。

妹はどうしているのかときくと、妹は兄の様にはなりたくないと言って、ゲームもほとんどせず、きちんとした生活を送っているという。本児はそんな妹に対してもイライラして、時々ちょっかいを出すそう。そういう時は母親もしっかり叱るが、それ以外はうるさく言っても仕方がないと思っているようだった。

さて、どうしたものか。まずは学校とも話し合ってみたいと伝えた。母親のお話を聴いて、学校で何かできることがあるのではと思ったからである。一方でもし本児さえよければ、夜の時間帯で本児と面談をしてみたいのだが連れてこられるかときいた。母親はたぶん連れてこられるとのことだったので、日程を決めてその日の面談は終了とした。とりあえず母親との関係構築はそこそこできたと感じた。

次の日学校に電話をし、母親と面談したのでその結果も含め学校と情報共有をしたいと申し出た。学校は直ぐ了解してくれて、コーディネーターと担任が入ってくれて、筆者と三人の話になった。

本児がゲーム依存の状態、それには父親の影響があったこと、父親と離れることになった影響もある事、母親が学校に頑張っで連れて来た時の学校の対応について等本児の状態と母親のお話を母親の了解のもと伝えた。その上で、本児の寂しい気持ちにも寄り添ってほしいし、学校に頑張っで来た時は、無理強いせず、来たことだけでもいっぱい褒めて、頑張りを認めてあげてほしいと伝えた。すると学校側としては、「他にもたくさん手のかかる子がいる中で、本児だけに特別な対応はできない、切れて暴れたりするのも困る、学校に来たからと言ってそれは当たり前前で、頑張っで来たのだから誉めてほしいというのは甘えである、本児には何かしら発達の問題があると考えているので発達検査につないでほしい」等と手厳しい答えしか戻ってこなかった。

正直この答えにがっかりした。本児に対する拒否感も感じられた。ちょっとした声掛けもできないほど学校は手いっぱいなのだろうか？母親との関係性が悪い中で発達検査を勧めるなんて不可能である。こんな状態では本児をこの学校に戻すのは難しいだろう。学校全体の方針がそのような感じと見受けられた。「それでは本児が学校に来るのは難しいかもしれないので、何か本児が登校できるようになるまでの支援を考えていく」と伝えて情報共有という会は終了した。（当時はまだこういう学校があったが、今は殆どの学校で、不登校の子どもが登校した時の声掛けなどとしてもやさしく、気を使ってきている。）

この結果も含めて二回目の面談に本児も登場することとなった。本児は、髪の毛を伸ばして顔を隠すような感じで、体は色白で少し肥満体形で菓子ばかり食べていそうな体つきだった。

母親に「学校は今のところあまり期待できない」と伝えると、さもありませんと大きく頷いていた。そこで、適応指導教室（注1）の活用に向けて、見学ができないか勧めてみた。母親は働いているので時間給が取れるかどうかにもかかっていたが、適応指導教室について聞いていなかったらしく、興味を持ってくれて、見学に行ってくれるこ

とにはなった。

一方本児とは、一回目でもあり、関係づくりに力を入れた。ゲームはどんなものをしているのかと聞くと、「〇〇」と答え、「他には？」と聞くと「××」とゲームの名前を教えてくれた。どちらもバトル系のゲームで父親の影響だというのが、中高生で流行っているゲームでもあったので、ある程度話が合わせられた。ゲームの話で少し盛り上げると、本児も心を少し開いてくれた。ゲーム以外に好きなことはと聞くと「絵を描くこと」と言うので、「じゃあ描いてみる？」というと「うん」という。いきなり人の目の前で絵を描く子は少ないが、本児はそれも気にしない様子だったので、画用紙と鉛筆、消しゴムを渡した。本児は、ゲームのキャラクターを描いた。結構上手だったので思いつき褒めた。母親も本児も嬉しそうだった。絵は相談室に貼ることにしているので、おいて行ってもらい、貼る許可ももらった。その上で次回の約束をした。

次の回までの間に、母子で適応指導教室の見学に行ってくれた。本児は、少人数で緩やかな雰囲気少し気に入ったようで、「此处なら行っても良い」と言ってくれた。ただし「毎日は無理」とも。

今まで昼夜逆転だった子がいきなり毎日適応指導教室に行けるはずもないので、週に1回くらいからで良いよと伝えると喜んでた。ただし通級については学校を通さねばならない。学校が渋い顔をするのは目に見えていた。適応指導教室に通うようになると学校には戻ってこないと思っているからである。適応指導教室は子どもが居やすいように工夫しているのだが、それを甘やかす場所ととらえているからである。案の定、筆者の方から適応指導教室を勧めた話をすると、嫌な雰囲気になったが、「学校に行けないし、小学生が母親のいない間ずっと一人で家にいるよりはよいのではないか」と伝え、母親が申し込みに行くので対応してほしい旨お願いした。

こうして適応指導教室への週1回の通級と、月1回のかかしへの来室という形が整い、面談が続

いた。

間に母親だけの面談も時々入れていった。不登校の場合、母親が辛くなったり焦ったりすることがあり、そこを支援しないと良い状態に変わってきていても後戻りしてしまうことがあるからだ。

本来は小学生が一人で家にずっといるのは認められないが、母子家庭でもあり、昼には母親がいったん帰るといった形にしてもらって何とかこの形を継続した。

翌年春、6年生になった。担任は変わったが校長は変わらなかった。6年生になったので、一度登校してみようという話になり、本児も昼夜逆転からは少し抜け出していたので、最初の二日くらい行ってみた。しかし周りの子と話が合わなかったり、担任との関係も上手く作れず、また不登校になってしまった。二日間行けたことはしっかり褒めた。それでも適応指導教室を続けることは大丈夫そうだったし、日数も、週1回だったのが週2-3回になっていた。このまま6年生も適応指導教室でということになった。6年生では修学旅行がある。本児はそれには行きたいと言い、参加することができた。修学旅行に参加の前後数日は学校に行けたが、その後はまた不登校ということになった。運動会や他の行事には参加しなかった。そもそも運動はあまり好きでもないし、得意でもなかった。最初にあったときからアスペルガー症候群の可能性を感じていた。修学旅行だけでも参加できたのは奇跡のように思っていた。こういう子は集団が苦手だし、コミュニケーションも上手ではない。特に同年代とは難しいからだ。

相談室で描く絵はかなり進歩し、独特な絵柄で、目を引くような作品も描かれるようになっていた。

貼ってある本児の絵を、別の保護者が相談室に来室時にみて、「この絵面白い！」と評価してくれたことを伝えると、すごく喜んでいて。

こうして適応指導教室に行ったり、少し休んだり、また行ったりして6年が終わろうとする頃、本児に中学に向けての思いを聞いた。すると「中

学は行こうと思う」とのこと。大抵の子どもが同じことを言う。中学になったらとか高校になったら頑張るといって、大抵数日か数か月で折れてしまうことが多い。そこで、「中学は頑張ろうと思っているんだね。すごいね。ちょっと学校が遠いけど大丈夫？」と聞くと、「多分自転車通学になると思うから」とのこと。微妙な距離なので自転車通学になるか確かではなかった。そこで、「もし自転車通学じゃなかったら難しいのかな？」と聞くと「うーん・・・、面倒かも」と言った。正直に言ってくれたのは有難かった。「もし行けたら、歩いてでも頑張ってみよう。新しい友達も増えるし、ゲームの話ができる子もいるはずだよ。ただ適応指導教室もあるから、両方使う感じでも良いよ。頑張りすぎると折れちゃうから無理しないでね。」と伝えた。

中学に上がってからは本児のみで来室し、帰りに母親が合流するという形で面談が繰り返された。最初の内は学校に行けたが、5月の連休明けくらいから休むようになり、適応指導教室に行くことの方が増えた。相談室に来ると、絵を描くだけではなく、ゲームや今興味がある話などを沢山したり、詩を書いて来て見せてくれたりということも増えた。詩の内容は、「死」や「心」や「精神」といったものを題材にしていた。時には「死」という文字だけで絵を描いてきたなどということもあった。思春期の心の揺らぎが思いっきり出てきた感じで、これも悪くないなと思って関わっていった。中二の時にはイライラすることが増え、ある時切れて、そこらにあったものを投げたことがあった。「物を投げるなら帰ってください」と言って帰らせたが、5分後くらいに戻ってきた。謝罪はなかったが、反省している様子が見えたので、そのまま残りの時間面談を続けてその日は終わった。以後暴れることも暴言を吐くこともなかった。

中学三年間は、適応指導教室も行けたり行けなかったりだった。母親もゲーム依存をなくすために、本児と約束をして、出来るだけゲーム時間を減らしたり、時にはWi-Fiのコードを抜いて会社

に持って行ったり等努力してくれたが、コードは自分で買ってきてしまって、抜いても無駄だと知った。筆者からは、ゲームだけを毎日している完全なゲーム依存の人の治療は精神科であること、麻薬中毒患者と同じであることなどを伝え、その危険性を理解させるようにしていった。本児はゲームではなく、中学に上がったからは、音楽を作ったりすることにも興味を持ち、自分なりに工夫していろいろなことを試していたようだった。そんな話を本児は相談室で沢山話してくれたし、中三の途中からは高校についても考えるようになっていった。中三になると、哲学的なことにも興味を持つようになり、ニーチェやプラトン等の本を読むようにもなった。

高校は通学のところを勧めていたが、本児と母親との話し合いで、某有名通信制高校になってしまった。こうなると中々外に出ないのではと心配したが、適応指導教室で知り合った先輩の影響で、アルバイトを始めた。最初はファストフードの店に入ったが三日でダウンした。しばらくしてまた別のお店に務めだし、今度はずっと続けていた。学校の方は何とか単位もとっていた。オンラインで知り合った、某国立大学の大学院生との付き合いが深まり、その方にラテン語を教えてもらったりして、更に哲学について学ぶようになっていった。オンライン上の彼女もできた。高校での課題提出も危なげだが何とかできていたしアルバイトも行けているという段階で、相談は終了となった。

この間母親とは、母親の私的な問題や、祖父が亡くなったり祖母が倒れたり様々な環境変化がある中で、本児と妹を支えている母親を、支える面談を繰り返してきた。幸い母親は倒れたり体調を崩すことなく元気に働いている。また妹も無事高校に合格し、安定しているとのことであった。

まとめ

不登校でゲーム依存の子どもに出会うことは多い。そういう時、筆者が考えるのは、「引きこもりにしない事」である。そのために考えるのは、

どこでも良いから小集団なり、なんなりにつないで、人とのコミュニケーションを持つ場を作る事、そして、本人の特性を生かして、本人が好きなことを伸ばせるようにすること、保護者を支えることである。

小集団は適応指導教室でも良いし、少年団でも、クラブでも、お稽古事でも何でもよい。将棋が好きな子に将棋クラブを勧めたこともあった。どこかに所属することは、不登校の子どもにとってとても大事である。そこには存在価値がついてくるからである。家で一人で居てゲームだけしていても、退屈だからゲームをする悪循環になるだけである。最近はオンラインでグループを作りゲームをしていることもあるが、その中での人間関係も中々大変で、喧嘩別れになることもある。それでもそうしたグループがないよりはあったほうが良い。

本ケースも、ゲーム依存ではあったが、最終的にはゲームより哲学の方が面白くなり、ラテン語を習得するまでになっていった。もともと力のある子ではあったが、学校という、強制される場は苦手で、自ら学ぶことに集中するタイプで、そういう子が増えているのも事実である。こういう子は学校に不適応感を持つ。したがって不登校になる。筆者の相談室に来ている多くの不登校児がこのタイプである。自分のペースで学びたい。自分のペースを守りたい。急かされたくない、強制されたくない、と思っている。友人関係もそううまくはない。ついズバツと正直に言ってしまって関係を壊すなどと言うこともある。そういう子たちがいられる学校は、フリースクールしかないのかもしれない。学びの形もこれからはオンラインで学ぶなど形を変えていく必要があるだろう。実際大学でもなんでも、オンライン授業は増えているし、通信制の学校も増えた。教育の形そのものに変化が求められているのかもしれない。

今回は一人の不登校児の成長をつづらせてもらった。